

第十章 漱石とショーペンハウアー

「子供」や「個」を国家＝民族存続のためのものとする発想に関して、漱石はショーペンハウアーから少なからぬ影響を受けているように見える。漱石とショーペンハウアーの関係は今までほとんど省みられることはなかったが、漱石とショーペンハウアーの関係は予想以上に深い。以下その具体相を示しておきたい。

一、「過去」の匂い

まず言えるのは、漱石は『それから』や『夢十夜』の「第一夜」、『永日小品』などで「匂い」の装置を効果的に使っていたが、そのことに関して触れながらショーペンハウアーの名をあげていることである。

或る香をかぐと或る過去の時代を臆^{ママ}起して歴々と眼前に浮んで来る朋友に此事を話すと皆笑つてそんな事があるものかと云ふショーペンハウアーを読んだら丁度同じ事が書いてあつたさすが英雄の見る処は大概同じであると我ながら感に入つた我輩を知りもせぬもの迄が我輩を称して厭世家だ杯と申す失敬だと思つて居つたが成程厭世家かも知れぬ（倫孰の香ひ 十月ニナルト去年ノ十月ヲ臭デ思出ス）（明治四十三年「断片」）

漱石における匂いが、過去の記憶を呼び起こす装置であったことが確認できるが、（注1）ここではそのことよりもショーペンハウアーへの言及に注意しておきたい。漱石はここで、自ら考えていたことと同じことをショーペンハウアーも言っていたのを知って喜び、「英雄の見る処は大概同じ」と言いながらショーペンハウアーに自分を重ね合わせている。「厭世家」という、自分に対する世評を肯定的に受け止めることになるのも、漱石が厭世主義哲学者として知られるショーペンハウアーのことをよく知っていたからのことである。

実際、漱石テキストはこのほかにもショーペンハウアーに関する言及をいくつか残している。たとえば、明治三十六年三月から六月の間の東大での講義録『英文学形式論』中で「文体」について語りながら漱石はショーペンハウアーに触れている。

如此分析の出来ない場合の起るのは文体(style)と云ふ語に広漠なる意義を含ませるに因ることもある。例えば仏蘭西のピユフオン (Buffon)の有名な言葉に、' Style is the man himself と云ふ句がある。又ショーペンハウアーは其文体論の初めに、" Style is the physiognomy of the mind、and a safer index to character than the face。" とある。茲に云ふ文体 (Style) を、私の所謂形式の意義に解すると、広漠に過ぎるのだ。ピユフオンやショーペンハウアーは吾々の頭脳中の内容、例へば、節抑と熱烈、誇大と謙遜、穏和と粗暴と云つたやうな性質を文体の中に含めさせるのである。

作家の文体の特徴を見分ける方法について述べている箇所だが、ここでショーペンハウアーを引用しているのはショーペンハウアーを読んでいたことを記すものと見ていいだろう。さらに二年後に発表された「カーライル博物館」(明治三十八) ではショーペンハウアーについて次のように言及している。

声。英国においてカーライルを苦しめたる声は独逸においてショーペンハウアーを苦しめたる声である。ショーペンハウアー云ふ。「カントは『活力論』を著せり、余却つて活力を弔ふ文を草せんとす。物を打つ音、物を敲く音、物の転がる音は皆活力の濫用に於て余はこれがために日々苦痛を受くればなり。音響を聞きて何らの感をも起さざる多数の人我説を聞かば笑ふべし。去れど世に理屈をも感ぜず思想をも感ぜず美術をも感ぜざる者あらば、そは正にこの輩なる事を忘るる勿れ。彼らの頭脳の組織は麁にして覚り鈍き事その原因たるは疑ふべからず。カーライルとショーペンハウアーとは實に十九世紀の好一對である。

カーライルについて述べながら「声」に敏感だという共通点を持つてる人物としてショーペンハウアーをとりあげ、二人を「十九世紀の好一對」とまで記している漱石の中で、イギリスにおけるカーライルのような人物としてショーペンハウアーが位置づけられていた見るのは不可能ではないだろう。つまりこの文章は、ショーペンハウアーという名前が漱石においてカーライルと同等な重さで刻印されていたことを示すものと思われるのである。

文章として残したもののほかに、蔵書の中にもショーペンハウアーの名を記した書き込みがいくつか見られるのだが、以下は、その題名である。

- 「Essays of William Hazlitt」(Ed. by F.Carr.London:W.Scott. “ Scott Library ”)
 Thomas a kempis 「Of the Imitation of christ」(London :Scott),
 * W.Knight 「The Philosophy of the Beautiful Part1」(London; j.Murray.1895
 “ University Extension Manuals ”)
 * Jhon.Beattie Crozier 「Histry of Intellectual Development」
 * Coleridge 「On the poetical Tenets and Poetry of Wordsworth」
 * 「禅門法語集」(山田孝道、明治二十八年十二月、光融館)

これらの中に記されている書き込みには単に「Schopenhauer」と記した(「禅門法語集」)ものから、「シヨペント同説ジャナイカ」(W.Knight 「The Philosophy of the Beautiful Part1」)、「Schopenhauer ノ Metaphysics of Love 参照」(Jhon .Beattie Crozier 「Histry of Intellectual Development」)のようにより具体的な言及があり、漱石がシヨペンハウアーをよく吸収していたことが示されている。たとえば、Thomas a kempisの「Of the Imitation of christ」の中、第三章「of a good peaceable man」のうち「A peaceable man doth more good than he that is well learned」と書かれているところには下線と共に次のようなメモが見られる。

Learning has not much to do with good one can do.Schopenhauer was not a good man.Kant was not good enough. Spinoza was great because he acted what he thought.His philosophy of Pantheism influenced the thoughts of Goethe and others in Germany.Because it is poetical.

このようにカントやスピノザなどの思想家と比べながらシヨペンハウアーを評するためにはシヨペンハウアー像が漱石の中ではっきりとした形で結ばれていることが必要であろう。スピノザに比べていい評価を受けているわけではないが、いずれにしる漱石がシヨペンハウアーのことを常に念頭においていたことは確かなのである。

二、文体観ほか

東北大学所蔵漱石文庫にはショーペンハウアーの著書が二冊入っており、それは「the scott library」シリーズの第102巻の「Essays of schopenhauer」と「The essays of schopenhauer」の二冊である。この中、多くの書き込みと傍線や脇線が見られるのは前者の方で、内容が重複するためか後者には読んだ形跡がまったく見られない。従って、本論では前者の書物を中心に検討することにしたい(注1)。

「Essays of schopenhauer」は、Rudolf diricks という女性が英訳して紹介文を添えているもので、前扉に黒色の万年筆による「K.Natsume」のサインとともに「Dec.17.1900」という日付けが見られる。購入時期か読んだ時期であるはずだが、いずれにしる渡英して間もない頃であったことが分かる。その目次は以下の通りである。

1. On authorship and style
2. On noise
3. On education
4. On reading and books
5. The emptiness of existence
6. On women
7. Thinking for oneself
8. Short dialogue on the indestructibility of our true being by death
9. Religion a dialogue
10. Psychological observations
11. Metaphysics of love
12. Physiognomy
13. On suicide

総計二百二十四ページにのぼるこの本は、ショーペンハウアーが晩年に、より多くの人に自らの思想を理解してもらおうとして著したという一般人向けのエッセイの翻訳と思われるのだが、ほぼ全体にわたって書き込みと傍線が施されている。

まず確認できるのは、漱石が引用していた「ショーペンハウアーの文体論」とはこの本の最初の章「On authorship and style」から引いたものだったということである。

.....
Style is the physiognomy of the mind. It is a more reliable key to character than the physiognomy of the body. To imitate another person's style is like wearing a mask. (12 頁)

漱石は上記の文章全体に脇線を引いており、「To imitate」以下には下線をほどこしている。心を現す様式として文体を規定し、他人の文体をまねるのは仮面をかぶるのと同じことだとするこの文章に、漱石は注目していたのである。もう少し先の「Affectation in style is like making grimaces」、すなわち文体を飾るのは顔をゆがめるのと同じだとするところにも下線を引いていて、文体をめぐる漱石の考え方に影響を及ぼした可能性も否定できない。そして、先の「カーライル博物館」のショーペンハウアーの引用は「On noise」からのものだということも確認出来る（ちなみに、ショーペンハウアーは全ての音のなかでもっとも自分を苦しめるのは馬車夫の鞭の音だとしている）。そして「On reading and books」のところでは、悪書は無用であるだけでなく有害なものであり、文学書のほとんどは大衆のお金をだましとるようなものだとするところに「quite so!」というメモを残していて、当時の一般的文学書に漱石もまた批判的だったようだ。

そして、最初に述べた「匂い」「嗅覚」についての言及をこの後に続く「Psychological observations (心理学的覚え書き)」の中に見ることが出来る。

It is only now and then that a man learns something ;but he forgets the whole day long .

Our memory is like a sieve,that with time and use holds less and less;in so far, namely, as the older we get,the quicker anything we have entrusted to our memory slips through it,while anything that was fixed firmly in it,when we were young,remains.This is why an oldman's recollections are the clearer the further they go back ,and the less clear the nearer they approach the present ; so that his memory,like his eyes,becomes long- sighted .

That sometimes,and apparently without any reason,long-forgotten scenes suddenly come into the memory,is,in many cases,due to the recurrence of a scarcely,perceotible odour, of which we were conscious when those scenes actulley took place; for it is well known that odours more easily than anything else

awaken memories ,and that,in general,something of an extremely trifling nature is all that is necessary to call up a *nexus idearum*. (1 6 2 - 1 6 3 頁)

人生には忘れられないいくつかの瞬間があって、回りの状況やその時点の感覚的把握によって記憶に深く刻みつけられる事があるという内容の前半に続く後半を訳すると次のようになるだろう(注2)。

とっくの昔に過ぎ去った場面が、一見なんの理由もないと思われるのに、突然まざまざと記憶に蘇ることが時々あるのは、ほとんどの場合、明瞭な意識にのぼらぬほどの僅かな匂いが、その場面の時と同じように感じられるということからくるのであろう。というのは、周知のように匂いは特に思い出を呼び起こしやすいもので、一般に「連想」はほんのわずかな刺激だけで十分だからである。更に、視覚は悟性の感覚であり聴覚は理性の感覚である。そして嗅覚は、ここで見たように記憶の感覚なのである。触覚と味覚は直接触れることのみ結びつけられるリアリストで、観念的な面において欠けている。

漱石はこの後半の部分に脇線を引き、次のように記している。

Strange I have often experienced this. But whenever I have mentioned it to my friends, they have never been able to understand.

これは先に見た明治三十四年の断片と内容的にほぼ一致する文章である。漱石は明治三十三年十二月にこの本を読み、余白に書き込んだのと同じ内容を手帳にも記しておいたものと考えていいのではないだろうか。

漱石テキストにおける花と香りの効果は、「ダナンチオ的認識」を「学び、あるいは盗もうとしていた」もので「官能」的な雰囲気をはらったものとされている(注3)。しかし、上記の文章を参考にすると、漱石テキストにおける匂いは、実は「官能」的装置というよりは「記憶」の装置であり、それは人から「学び」「盗」んだのではなく漱石独自のものです。ショーペンハウアーの考えに接することでさらなる確信を持つにいたったものだったと考えるべきだろう。たとえば『それから』で代助が百合を用意する場面なども、「官能」

的な雰囲気を出すためのものというよりは「過去」の思い出を呼び覚ます意図のものと考えられるのである。漱石がダヌンチオに関心を持ったとされる明治四十一年よりも十年以上も前に、漱石はこのように「匂い」に関して興味を持ちはじめていた。ダヌンチオとの出会い以前に書かれた、『文学論』（明治四十）の第一編第二章「文学的内容の基本成分」の中で文学の素材として「感覚」について説明しながら「嗅覚」を扱っていることにも、匂いに対する早い関心が確認できるのである。そうだとすると、漱石テキストにおける「匂い」の装置を、単に「官能」などの世紀末的枠 つまり感性の枠 にのみ閉じこめて考えることは再考されるべきではないか。漱石の「匂い」の装置は単に感性的というよりは、心理学的考察に依拠した、むしろ理性的判断に基づいた工夫としてみなすべきと思われるのである。

三、「愛」と種族保存

「匂い」の場合をかりにここで<ショーペンハウアー的思考>と称しておくならば、漱石テキストには実はこのほかにも<ショーペンハウアー的思考>を少なからず見ることが出来る。それは、「匂い」の場合のように漱石自らのメモなりが残っているわけではないのでその独自性を推定するのは難しいが、いずれにしろ、漱石が自らの作品にもその考え方を生かしたとの推定を排除できないものをあげておこう。

たとえば「metaphysics of love」の中でショーペンハウアーは、「愛」と称される男女間の気持ちや行為は、実は、次の世代、つまりまだ生まれない子どもの「生きようとする意志」の表れで、自己の種族を残そうとする人類共通の無意識の表れにすぎないとしている。これは今日の「利己的遺伝子」(ドーキンス)説を思い起こさせる主張だが、いわゆるショーペンハウアーの「生の不可視の意志」という思考が覗かれるところであろう。そして、漱石はこのような説にも共感していたようなのである。たとえば次のような文章。

Every kind of love,however,ethereal it may seem to be, springs entirely from the instinct of sex;indeed,it is absolutely this instinct, only in a more definite,specialised,and perhaps,strictly speaking,more individual ised form. (171頁)

あらゆる恋愛感情は、単に性的衝動が特殊な形であられものにすぎないと述べられているこの文章のところに漱石は「yes」と記している。

ショーペンハウアーは恋愛に意味があるとすればそれが次の世代を作ることにつながるからだとしており、恋愛はそのような種族の利益があたかも個人の欲望であるかのよう
に錯覚させる「妄想」であってそれはあくまでも生理的現象だとする。性欲とは人類の「生きようとする意志」の現れで、その意志は未来の子供の中に自己をすまわせるためのものにすぎず、愛の形がどんなに理想的で理知的に見えようとも、その最終的な目的は一定の性格と形態を持つもの 子供 を作ることにあるのだとするのだが、そのような箇所にも漱石は全体に脇線ともに下線を施している。それだけでなく、先にあげておいた John .Beattie Crozier の「Histry of Intellectual Development」の中の「The evolution of christianity」の章(250頁)のうち次の文章に書きつけられているメモを参考にと、漱石が、このようなショーペンハウアーの説にかなり注目していたことがわかる。

Or to put it in another way,we may say that while men and races considered as individual are engaged in working out their own private particular ends,the Presiding Genius of the World has so arranged it that by theseself-same actions they shall,quite unconsciously to themselves,work out its ends also -- ends more vast and sublime than those they know.

ここのところに漱石は脇線を引き、「schopenhaur の metaphysics of love 参照」とメモしている。おそらく漱石はここで、ショーペンハウアーが、人間にとっての愛を自らを残すための人類の意識せざる営為でしかないとしていたことを思い出していたのだろう。第八章で述べたように、漱石は『文学論』の中で「恋」の感情に関してかなりさめた認識を示していたが、そのことはショーペンハウアーと無関係ではなかったように思われる。それは「私の個人主義」におけるショ - ペンハウア - への言及にもつながっていくだろう。

もう少し先へ進むと「Without possession it is no consolation to a man to know that his love is requited」というところに下線がほどこされてあり、注目される。

肉体的な所有 その結果としての子供を得ることのない恋愛や結婚からは慰めを得ることが出来ないとするショーペンハウアーの説を漱石がどのように受け止めていたかは確認できない。しかし、子供の誕生こそを慰めとするようなこのような考えが、子供の不

在を不完全な愛（結婚）として表象させていたとしても不思議はないだろう。愛はあっても子供がいなかった家庭　たとえば『心』や『門』　における焦燥感や不幸の匂いは、このようなことも影響しているものと思われるのである。漱石テキストの中の夫婦が、子供がいなことを気にし「天罰」（『心』）と認識しているのは、ショーペンハウアーにおける「慰め」の欠如という認識と遠くないものである。そういう意味では子供の存在を結婚において不可欠のものとする子供中心主義の強化に『心』や『門』は一助していたことにもなる。前章で述べたように、テキスト内で彼らの犯した姦通や裏切りは子供の不在とつなげられ、彼らの結婚生活は決して幸福なものではなかった。世間の秩序を破った、＜正しい＞結婚ではなかった彼らの結びつきは、呪いの影を帯びることで子供中心主義の人々に安心感を与えてもいたのだろう。そして、その安心感は彼らの日常における子供中心主義や「法」をますます強固にさせていったはずだ。

ともかくも、国民国家成立とともに＜近代＞以降強化されることになった子供の不在に関する、漱石の否定的まなざしが、ショーペンハウアーの思考と無関係でなかったことをここでは確認しておきたい。

先の文章のあとに出てくる、個人の愛というのも結局は種族の必要によるもので、その際人間は利己的なものだからその活動が自分のためになされるのだという幻想を自分に植え付ける必要があって「恋愛」という妄想に陥るのだとするところにも漱石は全体に脇線を引いている。そして、種族の典型を回復させるために男女は自分に不足しているところを補完してくれる相手を選ぶのであって、そういうことを考えない性的行為は種族の「質（quality）」を考えずに「量（quantity）」のみを維持させようとしている点で下劣だとする（192頁）ところに「very suggestive」と記しており、多大な興味を引かれたらしいことを知ることが出来る。また、「生きようとする意志」（子供）は、自分の未来の両親の意識を統御することでその当人たちに純粹に自分たちの望みを追求するのだと錯覚させていると述べているところ（193頁）にも脇線が引かれている。

また、男性は愛を得た瞬間から愛情が減退し気が変わりやすいのに比べて女性の愛情は思いを遂げた瞬間から逆に高まると述べているところなどでは漱石は脇線をほどこし、「true！」と記して、全面的な共感を示している。

In the first place, a man in love is by nature inclined to be inconstant while woman constant. A man's love perceptibly decreases after a certain period; almost

evrey other woman charms him more than the one he already possesses;He longs for change: while a woman's love increases form the very moment it is returned. This is because nature aims at the preservationof the species,and consequently at as great an increse in it as possible. (182頁)

このあと、そのため結婚において節操を守るのは男には不自然なことで女には自然なことであり、それゆえに妻の婚外交渉は夫のそれより遙かに非難すべきことだとなつづく。『行人』では、一郎が景清にちなんだ父の話 自分の友人が契りを結んだあと捨ててしまった女をめぐつての話 を聞いてまさに同様の感想を述べていた。

男は情欲を満足させる迄は、女よりも烈しい愛を相手に捧げるが、一旦事が成就すると其愛が段々下り坂になるに反して、女の方は関係が付くと夫から其男を益々慕ふ様になる。是が進化論から見ても、世間の事実から見ても、実際ぢやなからうかと思ふのです。夫れで其男も此原則に支配されて後から女に気がなくなつた結果結婚を断つたんぢやないでせうか」(「帰つてから 十九」)

一郎の話聞いてお直が「妙な御話ね。妾女だからそんな六づかしい理屈は知らないけれども、始めて伺つたわ。随分面白い事があるのね」と皮肉たっぷりに反発し、父親が「そりや学理から云へば色々解釈が付くかも知れないけれども」と言つて「色々解釈」の一つにしてしまっているのは、当時においてはそれが一般的な考え方ではなかつたことを示すものであろう。一郎の説はあくまでも一郎独自の「仮説」として提示されているのである。一郎はショーペンハウアーに言及しているわけではなく「進化論」に触れているのみだが、知識人一郎がショーペンハウアーを読んでいた可能性は十分にあり(注4)、一郎の言葉がショーペンハウアーからの引用である可能性は十分にありうる。ショーペンハウアー - 經由の漱石の考えがそこに投射されていたものと考えられるのである。

愛の感情自体はショーペンハウアーにおいて醒めた解釈がなされているのだが、ともあれ恋に落ちた男女はすべて見捨てるという行為をもあえてとるのだとショーペンハウアーは述べている。つまり 愛を前にしては名誉は無視されると説くのだが、これに続く「a man has less concience when in love than in any other circumtances」のところに下線が施されており、だからこそ恋人たちは不倫さえも迷わずにやつのけるのであつて彼らは

社会的な障碍や人間が作った制度を無視するとし、愛のためなら臆病な者までが勇気を出すのだがそれとて愛の感情に隠されている「形而上的な使命(つまり人類の保存)」のためだ、としているところにも漱石は脇線を施している。愛のためにすべてを捨てて破滅に向かう男女の話は古今東西を問わず好まれた題材ではあるのだが、わたしはそういう意味でも『それから』の背後にショーペンハウアーの影を感じるのである。

ショーペンハウアーの愛情観は、愛とはあくまでも個人ではなく種族のための、それと自覚されない行動にすぎず、結婚して子どもが生まれることで種族の目的が達成されるとそれまでの自己欺瞞から目覚め、幻滅の時期となるものであり(203頁)、従って幸せな結婚などまれにしかないとするようなものだった。このような人間の本質は変わることなく永遠に人類の中に住み続けるであろうとし、その限り、ある女性のために犠牲も甘受しようとする意志などは種族の目的達成への欲望の現れにほかならないとショーペンハウアーは結論づける。漱石はこのようなところにも「first,second」との項目に下線をひいていて、丁寧に読んだ痕跡を残している。

四、利己心と偽り

ところで、あらゆる恋愛感情は性的衝動の特殊な現れにすぎないとする文章の次には以下のような文章も見られる。

And now let us more thoroughly investigate the matter. Egoism is a quality so deeply rooted in every personality that it is on egotistical ends only that one may safely rely in order to rouse the individual to activity. (178頁)

下線のところは漱石自身が下線を施しているところで、ここでは人間は利己的なもので自分「個人」のためにのみ動くものなので(つまりそれが種族のためのことと分かっていたら動かない)種族が存在していくために必要な行動を起こさせるために(種族保存のための欲求を感じられないように)、愛の錯覚が起こるのだとされる。このところは文章の核心内容とはさほど関係ないところだが、にもかかわらず下線を引いているのはこの文章が漱石に強い刺激を与えたということなのだろう。

エゴイズム 「我執」に関して漱石が早くから関心をよせていたのは周知のとおりで

ある。このような何気ない一言が漱石の人間認識に強く働きかけた可能性は排除できないのではないだろうか。むしろ「匂い」でのように、漱石自身の考えが先にあってショーペンハウアーによって確信を得るにいたった可能性も十分にある。

同じように、漱石における人間観に影響を与えた可能性のあるものとして第10章の「psychological observations」(「心理学的覚え書」)もあげておこう。

There is only one mendacious creature in the world man. Every other is true and genuine, for it shows itself as it is, and expresses itself just as it feels. An emblematic or allegorical expression of this fundamental difference is to be found in the fact that all animals go about in their natural state; this largely accounts for the happy impression they make on us when we look at them; and as far as I myself am concerned, my heart always goes out to them, particularly if they are free animals. Man, on the other hand, by his silly dress becomes a monster; his very appearance is objectionable, enhanced by the unnatural paleness of his complexion,--the nauseating effect of his eating meat, of his drinking alcohol, his smoking, dissoluteness, ailments. He stands out as a blot on Nature. And it was because the Greeks were conscious of this that they restricted as far as possible in the matter of dress. (145-146頁)

地上には嘘をつく生物は一種類しかいない。それは人間だ。それ以外の全ての生物は、あるがままの姿をさらけ出し、感じたままを外にも表すだけの正直さと真実さを備えている。この根本的差異の外面的しるしのないし比喩的表現は、人間以外の全ての動物が自然のままの姿で歩き回っていることだ。われわれが彼らの姿をみて嬉しく思うのもそのためであり、野放しになっている動物はとりわけそうだが、私はいつでも彼らをながめるとほっとするのである(以下省略)。

この部分に漱石は脇線を引き、「Do you like men to be true and genuine?」というメモを残している。「true」「genuine」な人が好きかという問いは、漱石のテキストに「偽善」に敏感で「正直」や「真実」を求める人物がたびたび登場していたことを思い出させないだろうか。『坊つちやん』の「俺」ををはじめ『行人』の「一郎」、『こゝろ』の「先生」。一郎

は直の「真実」を知りたい一心で実の弟に頼んで妻の貞操を試すといったような行動にまで走っていたし、『こゝろ』の「先生」は「私」に「正直」を求め、最後には「真実」を告白して死んでいった。そのような漱石テキストの基底に強い人間不信を見ることはたやすいが、同様の認識をショーペンハウアーも語っていたのである。

さらに先へいくと次のようなところに脇線が見られる。

the use of the word person in every European language to signify a human individual is unintentionally appropriate ; *persona* really means a player's mask, and it is quite certain that no one shows himself as he is, but that each wears a mask and plays a role .--In general, the whole of social life is a continual comedy, which the worthy find insipid, whilst the stupid delight in it greatly. (151 頁)

個人をあらわすのに、ヨーロッパのあらゆる言語で *person* という言葉が用いられるのは、巧まらずして当たっている。というのは、ラテン語の *persona* はもともと俳優の仮面の意味で、どんな人でもあるがままの姿を示すことはなく、仮面をかぶって、ある役割を演じているものだからだ。一般に社会生活の全体はたえず喜劇を演じていることだ。凡人どもはそれで大いに悦に入っているが、内容のある人々には、そのため社会生活などつまらなくなるのである。

やはり人間の二重性について述べている文章で、漱石テキストに見られる人間不信、あるいは「偽り」への敏感さは、このようなショーペンハウアー的思考とも遠くないものだったといえるだろう。

さて、あのミソジニーで有名なショーペンハウアーの女性観に関してはどうだったのか。たとえば、「On women」には、次々と偏見に満ちた差別的な言葉 例えば、女性が子供を育てるものとして適しているのは、女性自身が子供のようなもので、愚かで近視眼的な見方しか出来ない存在、一言で言えば子供と大人（男性）の間にあるような存在だからだ が並ぶのだが、こういったところにも漱石は脇線を施すなどして注目している。このあと、女性には理性と思慮の力に欠ける、誠実や正直の品性において劣っている、そのため武器として「技巧」を使う力を蓄えることになり、これは自然が男性に授けた「理性」

に代わるものである、などつつづくのだが、女性は男性より劣っている、二次的な性であるというところにも脇線が施されている。

漱石テキストが示す、〈知〉の男性、〈技巧〉の女性というような男女観もショーペンハウアーに限りなく近いと言えるのではないだろうか。ほかに、「Essays of William Hazlitt」(Ed. by F.Carr.London:W.Scott. “Scott Library”の中の「On reading old books」(150)のうち、「women judge of books as they do of fashions or complexions,which are admired only "in their newest gloss" that is not my way.」と書かれているところに漱石は「cf.schopenhauer」とのメモを残している。女性にとっての本が新しいファッションでしかないという考え方をショーペンハウアーも述べているのだが、それは漱石にとって「参考」すべき事項だったのである。

「禅門法語集」(山田孝道、明治二十八年十二月、光融館)の「妻鏡」のところには人間は財産をたくさん持っていようがまずしかろうが、それぞれに悩みを持つものだとし、財産家でも欲が深くて心を悩ませるのはむしろ貧しいと言うべきだとの内容が書かれているページに「Schopenhauer」と記している。おそらく漱石はここにショーペンハウアーの悲観的人間観 欲望のかたまりとする と通ずるものを見たのだろう。

先述の W.Knight 「The Philosophy of the Beautiful Part1」(London; j.Murray. 1895 “University Extension Manuals”)の8章の「the philosophy of Germany — schopenhauer and Hartmann」のところには次のような下線が見られる。

As a picture stands to thing pictured,as form stands to substance,so does.Aesthetic shine stand to the subject.

The subjects disappears before it;not only do the interests of self disappear,but the very ego itself subject disappears from the subjective side consciousness,and it emerges again on the objective side.

漱石は下線のところに、「ショペンと同説ジャナイカ」と記している。作品の美的輝きがそれを創った主体よりも強靱で、後世に残るものだと言ふこの言葉が、のち、百年残るものを書くと言ふようになる漱石の共感を呼び起こさなかったはずはなく、ショーペンハウアーの同じような言葉を思い起こしているのは当然というべきだろう。

数多くの西洋の作家や哲学者の影響が論じられてきた漱石研究史の中でもショーペンハウアーの名前があがることは今までなかったが、先に見た通り、ショーペンハウアーは漱石テキストに「子供」に関する考えをはじめ、人間観や愛情観において意外と深い痕跡を残している。ショーペンハウアーとの出会いは、十九世紀末の「西洋」を代表する哲学者であったことからすると、まさにもうひとつの〈近代〉との出会いだったとも言えるだろう。しかし、それは漱石テキストにとって必ずしも望ましいものだったとは言えない。

むしろ、これまで述べてきた〈ショーペンハウアー的思考〉は、たとえば「子供」に関する考えがそうであるように、単にショーペンハウアーや漱石だけに限るものではなく、時代に共通のものだったところも少なくない。そういうことは十分に承知したうえで、それにもかかわらずショーペンハウアーのことが漱石研究においてまったく触れられてないことに対するささやかな問題提起として本稿は試みられたものである。

注

1) 本論の最初の口頭発表は一九九八年十二月で、活字になったのは一九九九年であるが、この論のための考察を行ったのは一九九六年からであり、その当時はショ - ペンハウア - に関する書き込みは全集に収録されていなかった。そのため、一九九六年二月に東北大学図書館に出向いて調査した結果に基づいての論考であることを断っておく。現在収録されている二十七巻が出たのは一九九七年十二月だったが、韓国滞在ゆえ購入がおくれ、そのことを知らずに書いたのである。なお、新しい全集にも漱石の書き込みはすべて収録されてはいない。

2) ショーペンハウアーの翻訳は基本的には筆者によるものだが、『ショーペンハウアー全集』(白水社、1972・12)を適宜参照した。

3) 剣持武彦「夏目漱石『それから』とダヌンチオ『死の勝利』」(「イタリア学会誌」二十号、1972・1、後『近代の小説—比較文学の視点と方法』笠間書院、1975・4)は、漱石における「匂い」を「官能」の装置とみなしている。

4) 森鷗外の『舞姫』には、当時の青年の必読書として「ショ = ペンハウエルを右にし、シルレルを左にして」と述べられる箇所がある。ショーペンハウアーの翻訳は明治二十七年に中江兆民が「道德大学原論」として出版されたのが最初とされているので、原書で読まれていたと見るべきだろう。ショーペンハウアーの主著『意志と表象としての世界』は、明治四十五年になってようやく、『意志と原識の世界』という題で翻訳されている。